

東葛しぜん観察会

里山ですばらしい秋を見つけよう

勝股政雄（船橋市）

日 時：2014年10月19日（日）9:30～12:00 天気：快晴

場 所：鈴身川周辺（船橋市）

参加者：一般 16名（うち子ども 4名） 指導員 16名

担当指導員：勝股 宮川 伊藤

青空が高く、日の光が降り注ぐ秋真っ盛りの中、三つの班に分かれて素晴らしい秋を見つけようと出発した。ひんやりした森からの風を感じながら、ドングリの森の小道を行く。あざやかな青紫色の実を付けたムラサキシキブ、葉が真っ赤に色づいたヨウシュヤマゴボウが、日に照らされて輝いていた。ヤマノイモの葉も黄色に色づき、ムカゴを付けていた。子孫を増やすため、種だけでなく栄養繁殖もしているこの植物のしたたかさに驚く。同時に茹でたムカゴを味わい、ホクホクとした食感を堪能した。

しばらく歩いてニガキを発見。洗って用意した小枝と葉を噛んでみて、皆一様に苦い顔をした。この木の名が「ニガキ」との説明に皆納得。

低地に降りて、田んぼの畔を歩いていたら、オオオナモミを見つける。子どもたちは、すぐさま互いに投げて、服にくっつける遊びで大喜び。しばらく遊んだあと、虫眼鏡でとげとげの先端が釣り針のようになっているのを確認した。このほかにも、ひつつき虫の数々を手に取って観察した。

川の近くにハッカが花をつけていた。一枚葉をちぎって匂いを嗅ぐ。すっきりとしたメントールの匂いに、気分爽快となる。カラスウリが、台地の斜面に生えた木に絡み付いて、真っ赤な実をいくつも下げていた。内部の種の形の面白さと同時に鳥に食べてもらって、種を遠くに運んでもらう方法の巧みさを知った。

近くでモズの高鳴きが聞こえ、周りを見渡していたら、一人の男の子がアキアカネを捕まえた。指で挟んで、トンボの目のすごさを説明していたら、お腹の先から黄色い粒々が出てきた。虫眼鏡で覗いた子が、「あ、卵だ！」と叫ぶ。目の前で産卵のシーンを見てることができて、皆大喜びだった。



台地に低地が入り込んでいる起伏の様子を絵図で説明